

医療タイムズ

週刊医療界レポート

2014.12/15 No.2187

特集

どうなる、介護報酬 マイナス6%改定の衝撃を探る



タイムズインタビュー

先進の取り組みを続けて120年
高齢社会で目指すQOCの向上

社会医療法人高橋病院理事長

高橋 肇氏

ケーススタディ経営改革力

組織内外の情報共有と魅力発信経営プロジェクト
多職種・多部門間の連携と情報共有を強める契機に

日本医療経営機構主任研究員 田中将之氏

Top News

相談支援事業「質の強化」を目指し、好事例を共有 国立がん研究センター
消費税増税の影響が目立つ結果に 福祉医療機構調査

先進の取り組みを続けて120年
高齢社会で目指すQOLの向上



高橋 肇氏

社会医療法人高橋病院理事長

北海道道南地区の中核病院として120年の歴史を持つ社会医療法人高橋病院の理事長である高橋肇氏は、超高齢社会を見越した病院経営を推進してきた。医療・介護の連携強化の必要性をいち早く見抜き、ツールとしてITを導入、システム開発にも尽力してきた。医療界のニーズを的確に捉え続けてきた高橋氏の次の一手を聞いた。

取材●工藤菜乃

——理事長を務める高橋病院は、120年の歴史があります。

「当院は北海道函館市に1894年に開設し、足かけ3世紀にわたって続いてきた病院です。院長は私で6代目です。ですから医師になることも、病院を継ぐことも、生まれたときから決められた宿命とでも言いますか、ごく自然に受け入れて育ちました。

私が院長に就任した1996年当時、当院は赤字でした。それまでは医療費は右肩上がり、診療報酬もプラス改定が続いていた状況に甘え、次世代を担う人材を育ててこなかったことに一因がありました。当時の職員の中には古い考えの者も多く、院長就任時は「時代に取り残されているな」という印象でした。

そこで私がまず手がけたのは、地域における当院の役割を明確にした上で、理念と方針を示すことでした。当院のある函館市を含む道南地域に必要な病院は何か、まずは住民のニーズを調べることから始めました。

結果、道南地区は急性期病院が非常に多い一方で、高齢化率が高いことが分かりました。その上、当時道南地区にはリハビリテーション病院がなかったのです。そこで当院の役割は、リハビリテーションだと思い定め、舵を切ったわけです。当時から、きちんと地域のニーズを押さえた病院経営をしていけば、国、行政も必ず後追いでくれるはずだ、診療報酬上でも必ず評価されるはずだという強い思いがありました」

——高橋病院は、独自のサービスを導入していることでも知られています。

「そもそも祖父が新しいもの好きで、65年には道内で特定医療法人第1号の承認を受けましたし、聖路加国際病院に続き、関東以北で初めて人間ドッグを開始したのも当院です。祖父の『これは今後、必要になる』という先見性、DNAが、私にも引き継がれたのでしょうか。

私の時代になっても、病院機能評価や電子カルテを導入し、回復期リハビリテーション病院

にシフトを変えるなどしてきました。

2011年から始めた『デマンド・バス』もその1つです。これは、入院されている患者の家族のお見舞いを、ドア トゥ ドアで、自宅まで送迎する無料バスです。運転手は元タクシー運転手を3人常勤で雇いました。観光マイスターとホームヘルパーの資格を持っています。

こうした試みは、回復期リハビリテーション病院が函館市内に増加したこともあり、他院と差別化を図るため工夫したことの1つです。

このデマンド・バスの車内では、道中、運転手と家族が気軽にいろいろな話ができます。その会話の中から、患者、家族の『こういったサービスがあったらいいな』『ここは改善してほしいな』といったニーズを聞き取る機会が生まれたのは有難い副産物でした」

——患者のニーズから派生した役職に、コンシェルジュがあります。

「2008年から、函館の全景が見渡せる病院最上階にある『顧客サポートセンターひまわり』に、コンシェルジュを3人常勤で配置しました。いわゆるホテルのコンシェルジュをイメージしてもらえればと思いますが、可能な範囲で患者のニーズに応える職員です。

例えば、“リハビリ”というと辛いイメージがありますが、このコンシェルジュが窓口となって、リハビリ中でも患者のやりたいこと、好きなこと、今まで家でやっていた趣味などを、病院でも引き続き行えるよう手配します。患者の要望から実施したものとしては、カラオケや園芸、手芸など多数あります。デイケアの一環としても楽しんでもらっています。

ほかにもコンシェルジュは、買い物に行くのが大変な患者のために、簡単な日用品をワゴンに乗せて病院内を巡回し、販売しています。また、入院時には必ず説明にベットサイドまでうかがい、分からないこと、困っていることはないか聞き取りをします。枕が固い、ベットサイドシステムのやり方が分からないなどの要望に、その場で対応します。コンシェルジュを配

置して以来、大きなクレームを未然に防ぐことができ、その数は減少しています。コンシェルジュの役割を挙げていったらきりがなくらい、広範囲な仕事を担ってくれています」

——医療におけるITの可能性にいち早く着目し、システム開発にも参画されています。

「医療と介護の連携が、なかなかうまくいっていない現状をなんとか打破するため、医療と介護の連携を促すツールとして『IT』を活用しようと考えました。

07年より当院と市内急性期病院が全国に先駆けて導入した地域医療連携システム『ID-Link』は、全国へ拡がりを見せ、今では37都道府県、4100施設以上で使われております。しかし、超高齢社会を迎えた今、地域包括ケアシステムの中で、われわれに求められているのは、医療と介護の連携だけではなく、慢性疾患を抱える利用者自身の人生、そして生活をいかに支援していくかといった『生活支援』の視点も重要です。そこで、医療、介護、生活支援の情報を統合する情報ツールとして、私どもとソフトウェアの開発会社であるNDソフトウェア株式会社が共同して開発したのが『Personal Network ばるな』です。

『ばるな』の特徴は、利用者自身の発信が主体となっていることです。元気なうちに生活史や病歴などを登録しておき、病院や施設に入院時、入所時にスタッフは『ばるな』から患者の情報や希望を確認し、治療計画を立てることができます。退院後もケアマネジャーは『ばるな』を使いケア計画を立て、病院や施設関係者と情報を共有できます。また利用者自身が定期的に体調を報告し、その内容を患者、家族をとりまく支援者はいつでも確認できるのです。

これからの超高齢社会を乗り切るためには、QOL（生活の質）の向上とともに、QOC（Quality of Community：地域の質）の向上も不可欠となるでしょう。こうしたシステムの活用が、その一助になればと思います」

Profile

◆たかはし・はじめ氏（57歳）

1984年北海道大学医学部卒業後、同大学循環器内科入局。92年札幌厚生病院循環器内科医長。96年高橋病院院長。2001年社会福祉法人函館元町会理事長。全日本病院協会常任理事、全国老人保健施設協会常務理事、電子カルテCSI社ユーザー会会長などを務める。



猫 | 猫を9匹飼っている。「ペットは人間の癒しになる。私には必要不可欠です」